

# 紀 要

## 第 5 号

---

---

### 目 次

#### 序

1. 滋賀県出土の埴輪資料集(その2) …………… (稲垣 正宏・平井 佳子)
  2. 粟津湖底遺跡の地形環境 …………… (伊庭 功)
  3. 京のキリシタン  
—京都市内出土のキリシタン墓碑と  
キリスト教徒の動向に関する覚書— …………… (上垣 幸徳)
  4. 坂田酒人氏について  
—平城京「二条大路木簡」の発見と関連して— …………… (大橋 信弥)
  5. 人はそれでもタンパクシツを欲した  
—土錘出土量から見た近江における網漁の展開・特に中世—  
…………… (大沼 芳幸)
  6. 近江岡坂田荘の開発(上)  
—長浜市大東遺跡を中心として— …………… (北村 圭弘)
  7. 中世墓地にみる集団構造  
—その基礎的操作(1)— …………… (瀬口 眞司)
  8. 滋賀県内出土漆製品集成 一前編一 …………… (中川 正人)
  9. 草津市中畑遺跡出土の平安時代鞆について …………… (平井 美典)
- 
- 

1992. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

### 3. <sup>みやこ</sup>京のキリシタン

#### — 京都市内出土のキリシタン墓碑と キリスト教徒の動向に関する覚書 —

上 垣 幸 徳

##### 1. 始めに

日本の中世末期から近世初頭において、特異な宗教的あるいは文化的様相を見いだせるものにキリスト教に関わるところの所謂「キリシタン<sup>①</sup>文化」が挙げられよう。

ところで、このキリシタン文化が注目を受ける地域を挙げるとするならば、決まって九州地方が取り上げられるのが常である。しかし、キリスト教の布教が開始された当時、イエズス会を中心とした各教団<sup>②</sup>は最初に布教の礎となった九州地方はもちろんではあるが、当時の権力構造の中心地であった京都及び五畿内での布教活動について非常に努力を費やしていたのである。もちろん、その後キリスト教徒に襲った各種迫害によって現在ではその痕跡は近畿地方においてはほとんど留めないのが実情ではある。しかしながら、当時を忍ぶ遺物は極限られた量ではあるが今日の我々が知るところのものがあり、また、海外に残された史料によってもある程度のところは窺えるようにはなった。今回の小論では、これらの、特に京都市域内で発見されたキリスト教徒の墓標を中心とした遺物と今日残されている史料を通じてキリスト教徒たちの生活や文化といった歴史的な事象を検討して行く上で気付いたことを2、3とりまとめたものである。

##### 2. キリシタン墓標について

当時のキリスト教徒の石製墓標、所謂「キリシタン墓標」は、京都市内で15例発見されているが、おおよそ次の2種類の形態に分類できる。

1類 日本のもとの通常墓標と同じく地面から直立するもの。正面の形態によって、

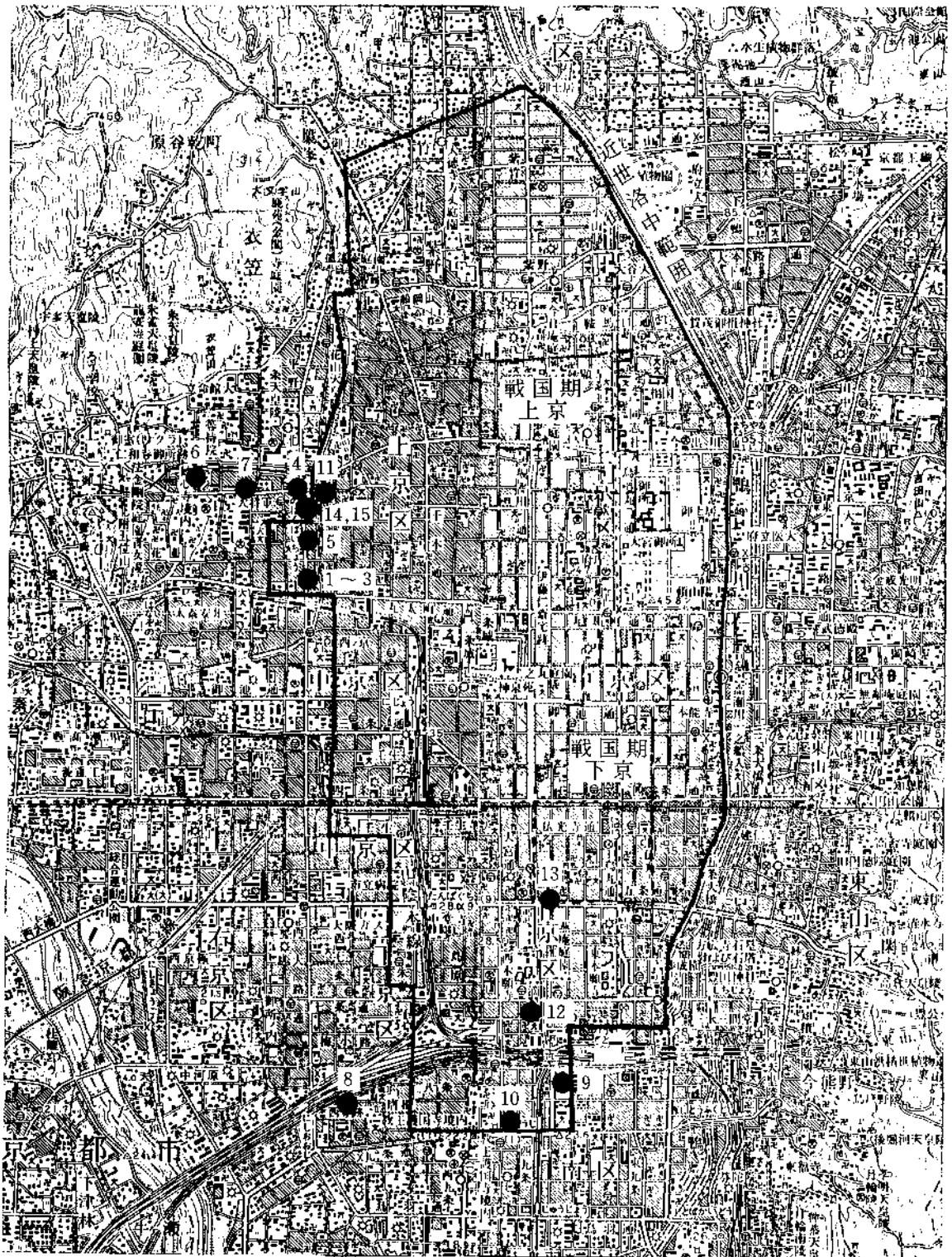
- a. 尖頭アーチ形
- b. 半円アーチ形

の2種類に細分する。

2類 正面の形態がかまぼこ形をした直方体で、地面に伏せて置かれるもの。

日本において、1類は光背形の石製墓標に良く似てはいるが、2類については全く特異なものである。ただし、1類は西欧諸国においても普遍的に見られ、2類についても西欧の石棺の蓋石に起源を求めることができる<sup>③</sup>。

墓標には銘文が施されているのが普通である。銘文にはその墓の主と考えられる名前と命日と考えられる紀年銘に分けられる。名前には俗名と洗礼名両方有るもの、洗礼名だけのもの、俗名だけのものがある。



第1図 墓標発見地分布図 (1/50,000)

紀年銘をもつ墓標の年代は、全て慶長年間のものである。最古の物が慶長7年で最も新しい物が慶長18年のものである。これによってこれらの墓標がわずか11年間の間に製作されたことが解る。この内1例については西暦と元号で年代を記しており、もう1例は西暦のみで年代を記している。西暦で年代を記す場合は、キリストの誕生から、と言う意味で「御出世以来」の言葉の以下に漢数字で西暦年が記される。没年と同時におそらく命日であると考えられる日付も記されている<sup>49</sup>。

使用された石材については、砂岩と花崗岩の2種類がある。現状では1類が砂岩製で、2類は花崗岩製である<sup>50</sup>。

墓標の形態に違いのあることについては先に述べたとおりであるが、それぞれの違いに相関関係が指摘できなくはない。例えば、形態の違いと使用石材の違いが一致していること、西暦年号を施した墓標が2例とも2類であること、その2例の墓碑銘の施し方の類似等が挙げられよう。ただし、以上に指摘した違いやそこに見られる相関関係が意味するものについて言及することは資料数がわずか15例と極端に少ないことから非常に難しいと言わざるを得ない。遺憾ながら、今回の論考においてはそのことについては触れないこととする。

次に、これらの墓標の分布であるが、図1に示したとおりとなっている。ただし、この分布図で示された分布はあくまでも発見場所の分布であり、これらの墓標のうち、どれだけのものが原位置を保っているかはほとんどわからない状況であり、明らかに原位置を離れているもののほうが多いことは言うまでもない。そのことを踏まえつつも、あえてある傾向を分布状況の中から見いだすならば、大將軍社から下立売通までの西大路通を軸とした周辺と東寺の周辺に発見場所の集中域を指摘することができる。

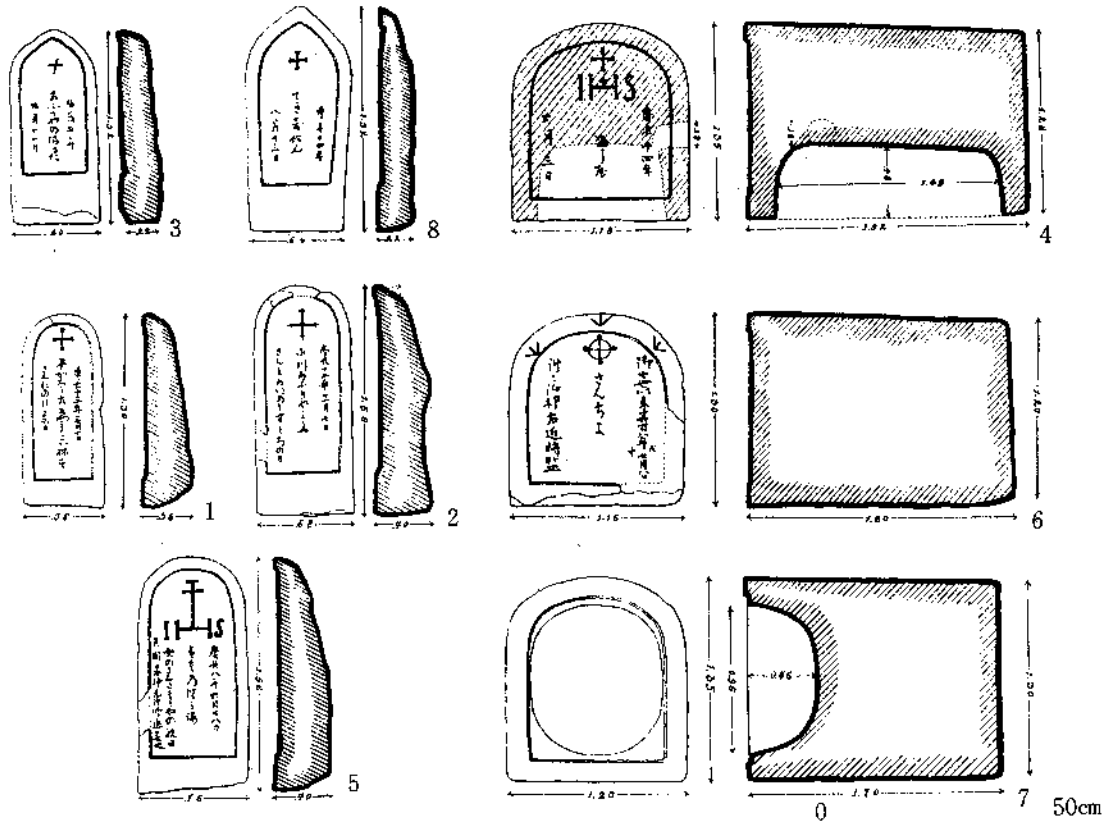
### 3. 史料における京都での動向

ルイス＝フロイスの著わした『日本史』<sup>51</sup>によると、イエズス会の宣教師が京都において常駐するようになったのは、1559年のガスパル＝ヴィレラが最初である<sup>52</sup>としている。その後の布教活動の結果、キリスト教徒はその数を増やし、1575年には、「被昇天の聖母教会」（所謂「南蛮寺」）を建設するに至った<sup>53</sup>。

その後の紆余曲折を経て、結局禁教令などによる豊臣・徳川両政権の迫害によって京の都のキリシタンは姿を消してしまうのであるが、その間に残された幾つかのエピソードの内、織田信長の上京焼き打ち事件に関しての記事に興味を見出す部分があるので、以下に紹介してみたい。

織田信長が足利幕府15代將軍義昭との攪執の結果、1573年4月に上京を焼き打ちするに至ったが、その際に当時都に居たイエズス会の司祭ルイス＝フロイスは難を避けるため東寺の近くのある人物のところに逃げ込んでいる。

彼自身は教会に踏み止まるつもりでいたらしいが、周囲の助言によって一時難を避けるために教会から離れることにした。件の人物の家に行くため一旦九条<sup>54</sup>で案内する人間と落ち合い、その後一緒に行く手筈になってはいたが、落ち合う先には既に荒木村重の軍勢が進軍しており、非常な混乱の末、路傍の掘立小屋に逃げ込むことになってしまった。しかし、逃げ込んだ場所にも危険が及びそうになったので最初に逃げ込もうとした家へ行ってみると、家を囲む堀に架かる橋は外され、



第2図 キリシタン墓碑実測図 (番号は図1、表1と共通)  
3, 8=1a類、1, 2, 5=1b類、4, 6, 7=2類

表1 キリシタン墓碑集成表 (法量の単位はcm)

発見場所	紀年銘	形式	高さ×幅	その他の銘文	備考
1 上野区南池袋下立売下	慶長13年3月10日	1b	38.0×17.3	ギリシア十字 「平賀太郎左衛門まこい様」 「さんむのりよの日」	延命寺境内発見 京都大文学部博物館所蔵
2 上野区南池袋下立売下	慶長15年11月7日	1b	49.2×21.2	三葉十字 「小川あふきやあしや」 「さんとめいあはすとの日」	延命寺境内発見 京都大文学部博物館所蔵
3 上野区南池袋下立売下	慶長7年9月11日	1a	40.0×18.2	ギリシア十字 「あふきやのまゐた」	延命寺境内発見 京都大文学部博物館所蔵
4 上野区一茶通大将軍社前	慶長14年7月7日	2	41.9×38.7	ギリシア十字 「IHS」 「いし□??」 「ふしあ」	成願寺境内発見 手水鉢転用 京都大文学部博物館所蔵
5 上野区天神通下立売上	慶長8年8月28日	1b	46.5×22.7	二葉十字 「IHS」 「□をのほりよ」 「豊のさんたまりやの辰日」	浄光寺跡地発見 京都大文学部博物館所蔵
6 上野区等持院南町地先	明治以来1608年戊申 (慶長13年) 7月8日	2	39.7×35.5	円形十字 「さんちよ」 「放々治郎右近将監」 周縁上部に矢印型刻印3個	京都大文学部博物館所蔵
7 上野区大将軍町地先	不明 (文字喪失)	2	41.3×52.1		地蔵院境内発見 手水鉢転用 京都国立博物館所蔵
8 南区旗本平塚町地先	慶長14年8月13日	1a	45.7×20.6	ギリシア十字 「てき磨あん」	京都大文学部博物館所蔵
9 下京区針小路堀川真入ル	□出世以来160□年 慶長□□ 11月10日	2	28.4×32.4	ギリシア十字 「うすらい」 「いさへ通」 「さんとめいの□□□」	西福寺境内発見 京都大文学部博物館所蔵
10 下京区西九条河原町地先	なし	2	42.4×33.9	(表) ギリシア十字 「恵安」 「い梅」 「女」 (裏) ギリシア十字 「明女」 「梅す」	旧九条小学校境内出土 京都大文学部博物館所蔵
11 上野区西町2	慶長11年正月晦日	1b	43.6	ギリシア十字 「内まゐた」	成願寺境内発見 京都大文学部博物館所蔵
12 下京区魚羽通堀川西入ル	慶長13年3月3日	2	32.5	三葉十字 「初まし空」 「さんかよの日」	京都大文学部博物館所蔵
13 下京区堀ヶ井五換	不明 (摩滅?)	2			京都国立博物館所蔵
14 北区大將軍川端町	慶長9年	1b	48.5×21.5	二葉十字 「IHS」 他	北野遺跡出土 (昭和56年度立会調査)
15 北区大將軍川端町	慶長12年	1b	44.0×20.5	ギリシア十字 「IHS」 他 下邊に表記	北野遺跡出土 (昭和56年度立会調査)

門は閉められていた。膝まで水につかりながらようやく堀を渡ったものの先に逃げ込んでいたキリシタン達に「東寺の攻撃があるかもしれない。」として中には入らないほうが良いと言われた。だが、他に行くあてもないので最終的に彼らはこの家の中に逃げ込んだのである。

ここで注目されることは、キリシタン墓標の出土地の集中地域に東寺の周辺が見出されることである。しかしながら、記事には逃げ込んだ先の主人がキリシタンであるとは書かれてはいないし、この記事一つをもってして「キリシタン町」といったような集落があった<sup>(4)</sup>とは即断できない。だが、この逃げ込んだ家にはフロイスより先に逃げ込んできたキリスト教徒が多数居たこと、寺院が相当強大な勢力を持っていた当時においてキリスト教徒に寛大な姿勢を示した人物が居ること、さらに、この地域で出土している墓標は大方2類であり、統一性を持っているように見受けられることから、ある一定の数のキリスト教徒が集まって住んでいるような地域がこの付近にあったと考えるのもよいのではなかろうか。

これに付け加えて、ここで取り上げている地域の範囲中に含まれる平安京左京九条二坊十三町の調査で検出された御土居に伴う堀から、ポルトガル語で書かれていると思われる荷札が出土しており<sup>(5)</sup>、この荷札が当時のキリシタンに関係してものであると推測されていること<sup>(6)</sup>にも注目できる。

ただし、ここで注意しておきたいのはこの事件があった当時既にそのような集落があったのではないことである。なぜなら、フロイス自身「当時キリシタンのほとんどは下京にいた<sup>(7)</sup>。」と述べているし、紀年銘をもった墓標は慶長年間に限られているからである。ただ、墓標が示すような時期に集落が形成される萌芽が当時既に現れている史料としては評価を与えられるのではないかと思う。

#### 4. おわりに

非常に限られた資料によったため、全く取りとめのない話に終始してしまった。

今回、簡単ながらキリスト教徒に関する墓標の形態分類を試みたわけであるが、資料数が限定されていることと公の場にキリスト教徒が現れていた時期が非常に短いことが相まって、現状では一歩先の編年作業等といった考古学においての体系的な作業は非常に困難な状況であると言わざるを得ない。

しかし、岩村清氏が指摘している<sup>(8)</sup>とおり、キリスト教に関連した遺物の発見や遺跡の調査の試みが行なわれているという事実を日本におけるキリスト教の歴史的研究の中で意義づける必要があるはずである。また、近年活発になった中・近世史の研究においても重要な部分であり、そこで果たした考古学の役割を考えると日本キリスト教史の研究においても還元できることは少なくないように思われる。この一文がその試みの引き金にでもなれば幸いかと思う。

<追記> 本文をまとめるに当たって神田高士氏（大分県臼杵市教育委員会）から教示・協力を得た。記して感謝いたしたい。

#### 注

- 1) 本文中では「キリシタン」という言葉については、固有の事象に関わるときだけに用いるようにし、単に当時の「キリスト教徒」の意味では用いないようにしている。

- 2) 他に著名なものとしてフランシスコ会、ドミニコ会が挙げられる。
- 3) 新村出・濱田耕作「京都及其の附近発見の切支丹墓碑」『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊 1926
- 4) ここでの日付については、日本の年号で紀年銘のあるものは、その日付に31日の日付が出てこないことから日本での太陰暦での日付であると考えられる。しかし、等持院南町発見の西暦年号しか紀年銘を持たないものについてはその日付からのみでは太陽暦を用いているのか太陰暦を用いているのかは判断し難いものがある。ただ、西暦年号に続けて十干十二支を記したそのすぐ後に日付を記していることからこの日付は太陰暦を用いている可能性のほうが高いと思われる。
- 5) 石材の判別は京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古資料目録2』1968および実現による。
- 6) フロイス著『日本史』については、ルイス=フロイス『日本史』松田毅一・川崎桃太訳1987を参照した。
- 7) フロイス『日本史』第1部第24章
- 8) フロイス『日本史』第1部第105章
- 9) 当時の京都は上京と下京の二つの町に別れており、応仁の乱以前の京都に比べ非常に矮小化した町であった。下京の南限は当時の五条あたりまでで、当然ここに出てくる九条は京の町の外に形成された村落に過ぎなかった。高橋康夫『洛中・洛外』1988参照
- 10) 江戸時代の古地図によると「だいうす町」という名称のキリスト教徒の集まった町が3箇所あったことが知られている。「だいうす」とはキリスト教における神デウスが詛ったものでキリスト教のことを「だいうす教」と呼び習わしていたことがある。
- 11) (財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987
- 12) この荷札の裏面に書かれたポルトガル語の内容については判読できず不明であるが、表に記された「Pe. せるそ様のせんか如庵様」の墨書の内、「Pe. せるそ」がイエズス会の宣教師セルソ=コンファローネ、「如庵」が洗礼名と推測できるところから、当時のキリスト教に関係したものであると推測される。梅川光隆「京都・平安京左京九条二坊十三町」『木簡研究』第7号1985および京都市考古資料館『桃山時代の京都』1989参照
- 13) フロイス『日本史』第1部第101章
- 14) 『季刊考古学』第3号1983に掲載された賀川光夫「キリスト教」の文中にあるコラム

#### 参考文献

- 京都帝国大学文学部『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊1926  
 京都府編『京都府史蹟勝地調査會報告第1冊』1919  
 京都府編『京都府史蹟勝地調査會報告第5冊』1923  
 京都府編『京都府史蹟勝地天然記念物調査報告第17冊』1936  
 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古資料目録2』1968  
 (財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1983  
 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ 空間』1989

## 編集後記

本号には9編の論考を掲載することができた。第4号が協会設立20周年記念ということもあり、多くの論考が寄せられたため、本号には1篇の原稿も集まらないのではないかと編集者の杞憂が一蹴されたことに安堵感と喜びを覚えた。これはひとえに職員各自の日々研鑽の賜ものであり、それぞれが発掘調査のみに忙殺されることなく小さな研究者としての責務を全うしたことの何よりの証しとして評価されるものであると考えられる。次号以降もより多くの方々からの投稿を期待する次第である。

編集者

平成4年3月

### 紀要 第5号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775) 48 9780・9781

印刷 中西印刷株式会社  
京都市上京区下立売通小川東入ル  
Tel(075) 441-3155 Fax(075) 441-3159